
エンド・オブ・シティ

心乃鍵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンド・オブ・シティ

【Nコード】

N8047H

【作者名】

心乃鍵

【あらすじ】

坂木輝璃は友人達と東京に買い物に来ていた。仲の良い彼等。いつもと変わらない日常。そんな彼等を変えたのは一本のアナウンス。「・・・もしも一ヶ月間逃げ切れたら何でもかなえてあげる。」悲劇の始まり。彼らの運命は・・・？

0日目　始まりの放送

昼間時、日の光が街の大通りを照らす。

人ごみを避けながら歩いている中学生くらいの少年。
暑そうに汗をポケットに入っていたハンカチで拭く。

？「なんで、こんな暑い日に外で・・・」

ここは東京。

今日は友達と東京で遊ぶことになっていた。

俺の家は東京ではないが友達が東京に行こうと言うのでこんなところまで電車で来た。

しかし、暑い・・・流石にこんなに暑いと帰りたくなるな。

だが、そんなことしてみろ！ドタキャンだとか言われて馬鹿にされてしまう。

まあ、なんとか待ち合わせ場所まで行けば休めるだろう。

？「おい、輝璃ー！」

前から二人の少年が俺のことを呼んでいる。

俺の名前は坂木輝璃^{さかき きり}15歳。

体力はあまりなく頭脳系もダメなほう。簡単に言えばとりえなし・・・

？「大丈夫か？ボーツとして」

こいつの名前は岡崎速人^{おかざき はやと}15歳。

こいつはスポーツ系が得意で頭脳もまあまあの方。

クラスではいつも人気者。簡単に言っちゃえば優等生である。

さっきの奴は黒木和斗^{くろぎ かずと}15歳。

こいつは工作系の作業をやらせたら生徒だけでなく先生も関心してしまうほどうまい。

頭脳は良い方でスポーツも出来ない方でもない。

和斗「こんなに暑いから来ないかと思ったよ」

輝璃「けど、来なかったらドタキャンだってメールとかするべ？」

速人「まあ、そうなるな」

危なかった。このまま来てなかったら凄い事になってた。

けど、俺ってドタキャンだつてにビビりすぎじゃないか？けど、やっと座れ・・・

和斗「とりあえず、何か買いに行こうぜ」

輝璃「えっ！」

速人「了解」

輝璃「えっ！」

えー！俺今さっきこの地獄の様な暑さに耐えながらここまで歩いてきたのに

休憩無しなんですカー！っておい！何で先に行っちゃってんだよ

（3時間後）

輝璃「疲れたなー」

速人「そうだな」

和斗「それに、暑いから余計にな」

少し気になることがあるのですが、何故に二人ともこんなに買い物してるわけ？

俺の持つてる袋は2つ、二人は4つ。

買いすぎじゃないか・・・

——ピーポーン——

な、なんだ今の？

どこかのスピーカーから聞こえる。

スピーカー「今、東京にいる人たちこんにちはー。明日から君たちに面白いゲームに参加してもらいます」

テレビとかでモザイクの掛かっている人みたいな声。
ゲーム？どこかの宣伝か？

スピーカー「なお、これに参加しなかった場合」

——パチン——

指を鳴らす音がした瞬間、目の前にあった大きな建物が爆発した。

——キヤアアアア——

周りにいた女性の人が悲鳴や人々が逃げ惑う声。
うあっ！な、何だよこれ！やばすぎだろ！

スピーカー「今度は君たちの誰かをこんな風に爆発させちゃうかもね」。もしも、一ヶ月生き残った人には何でも願いを叶えてあげるよ」

笑いながらこんなことを言っている。

男性「こ、こんなところにいられるか！」

前にいた男性が目の前を走っていった。

——パチン——

その瞬間、その男性があのだ建物のように爆発した。
男性の血や血肉が近くにいた人や道に飛び散る。

——キヤアアアア——

人々の悲鳴がさっきより増して聞こえる。

スピーカー「だから、逃げたらこうなるって言ったのに」

スピーカーの声のやつは少し笑いながら言っている。
おかしい。人を殺しといてあの反応……

スピーカー「皆さんもこんなことしないように！それでは明日から
がんばってください」

そう言い残すとスピーカーからはもう声がなくなった。

周りにいる人たちは悲鳴を上げ逃げ惑っている。

こ、こんなイカれているやつのゲームが始めるのかよ．．．
（続く）

1日目〱ゲームの開始〱前半（前書き）

皆様、お久しぶりです。鍵です。

ついにこの1日目から彼らの逃走劇が始まります。
至らない点もあるでしょうが見守ってください。

1日目〜ゲームの開始〜前半

朝の日の光が少年の顔に掛かる。
その日差しにベットで寝ていた少年は眠たそうに顔を擦りながら起きる。

輝璃「もう朝か・・・」

ここは夜な夜な探し出したデパートのベットなどが売っているフロア。

昨日のことがあり家に帰れなくなっていた。

というかこの街から出れないと言った方が分かりやすいだろう。

昨日この街の周りをデパートの屋上から見たら街をなにか結界のような壁が張ってあった。

完全にこの街から出れなくなっているようだった。

ほかに電話をしようとしたら電波がなく電話も使えない。

だが、テレビはなぜか使えた。

テレビじゃなくて電話にしろよ。

と、ツツコミしてみたりもした。

とりあえず、今日はゲーム1日目。

正直言って、生き残れないと思う。

俺らはただの中学生。

あっちは正体不明の怪物。

もし生き残ったとしても三人の内誰かが死ぬ予感がする。

和斗「やっと、起きたか」

和斗は大きな荷物を持って止まっているエスカレーターを上ってきた。

輝璃「起きんの早いな。というかそのデカイ荷物は何だ？」

和斗「今日のために使う道具を片っ端からこのデカイカバンに入れてんだよ」

それにしてもカバンが、はち切れそうなくらいになっているんですけど・・・

それに、なんかギシギシとカバンから聞こえるのだが・・・
ヤバイ、絶対破れるべ。

速人「和斗。あんまり持っていこうとすると捕まるぞ」

和斗「そうだな。俺、物が置いてあったフロアに物戻しに行ってくるわ」

そう言うと、和斗はエスカレーターを降りて行った。

速人「お前もなんか荷物とか持っていかなくていいのか？」

輝璃「持っていく荷物か・・・」

どんなのを持ったらいいんだろう。

なるべく軽くて武器になる物かな。
それとも食料などかな。

速人「持っていくものがあるなら早くしたほうがいいぞ」

速人はそう言いながら自分の腕につけている時計を見る。

輝璃「了解。何かしら使える物はないか探してくるよ」

輝璃はベットから飛び降りる。

—— 30分後 ——

速人「もう、8時45分か・・・」

時計を見ながら速人はつぶやく。

和斗「そつだな・・・あと、15分で開始・・・」

速人たちは空気が重くなるような言葉を言う。

輝璃「おい、テンション高く行こうぜー！」

エスカレーターの上に階の手すりからすごい速さで降りてくる。
その瞬間その空気がドーンとものと重くなった。

だが、輝璃の言葉でみんなの緊張が一気になくなる。

そして、笑いだす。

和斗「それもそうだ。始めからこんなテンションじゃいけないな」
速人「ありがとな輝璃」

輝璃「いえいえ、どういたしまして！」

俺にはこんなことしか言えない。

こんなことしか出来ない。

けど、みんながそれで気持ちになるならそれでいい。
それでみんなが弱気にならなければいい。

和斗「よっしゃ、頑張っていくか！」

三人は頷き合い笑う。

開始まであと5分・・・

これから俺らは想像を超える地獄へと足を踏み入れようとしている。
もう、死んだりするとかは言わない、思わない！

それこそがもう死んでる。

迷わない！必ず、必ず生き残って家に帰る！

そして、このゲームを始めた奴をぶん殴ってやる！

そんなことを思っているともう5分しか残っていない。

なんか緊張してきたー！

ちびりそうー！

速人「ビビってるのか輝璃？」

笑いながらからかう速人。

輝璃「そっ、そんなこと・・・ある」

和斗「お前がテンション上げろー！て言っただのになんだよそのテンション」

輝璃「よっ、よし。テンション上げるぞー」

速人「無理してんならやめたら？」

輝璃が緊張しすぎて速人たちに輝璃の気持ちかモロにばれていた。

輝璃「じゃあ、やめます・・・」

すまない。言いだしっぺの俺がこんなテンションで・・・

輝璃は時間を見るともう3分

速人「もう3分か・・・もうそろそろここから出るか」
輝璃「そうだね」

こんな狭いデパートの中じゃすぐに見つかっちゃうし。
それにここだと俺らの寝る場所が壊されてなくなってしまう。

三人はエスカレーターを下り出入口へと向かう。
だが、出入口の前で三人の足は止まる。

速人「覚悟はいいか？」

速人は出入口のドアの前で言う。

もう、ここからは逃げられない。
なら、やってやらー！

輝璃「OK！」
和斗「ああ」

速人はドアを開け走り出す。
それに続いて和斗も走り出す。

もうどうにでもなれだー！

輝璃も二人の後を追いかけて行った。

1日目〱ゲームの開始〱前半（後書き）

再び登場！心乃鍵です。

始まりましたが逃走は次の巻からですね…。

自分はまだ学生なんです、ハイ。

故にこの時期はテストと言う名の戦いを強いられています。更新遅いのはそのせいです、たぶん…。

とりあえず次のアップは来週辺りです。

注意―作者の点数が悪ければもうアップの可能性は無いです……

…orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8047h/>

エンド・オブ・シティ

2010年10月16日06時15分発行